

「本典」の組織より見たる

## 「行信」の問題に就いて

秃  
諦  
住

「六要鈔」には「本典敎卷」の題號を釋するに當つて、「本典」の内題を指し「上首題者一部總稱」と述べられてゐる。若し此の見解が妥當のものであるならば、「本典」六卷の内容を必然的な理由から統一したものが「顯淨土眞實敎行證文類」の内題であり、亦其の已證を全内容に對して端的に表明したものが「敎行信證」四法の外題でなければならぬ。此の小論致に於て私の主張せんとする所は、まさしく此の理由を「本典」の組織と内容に辿らんとする所にあり、其の解決が、組織の上に跡付けられる「宗祖」の提擄せられた「行信」の關係であると云ふことである。従つて私の論證の過程は、此の問題に關して先づ次の如く限定することが適はしいであらう。即ち「本典」六卷の内容は、此れを、



と圖示せられ得るから、題號が其の重要な内容としての「眞實信」と「眞佛土」並に「化身土」を沒す

る理由は、

(1) 所期の土を異にする「眞實」と「方便」の四法が如何なる理由のもとに「顯淨土眞實教行證文類」の名稱のもとに攝せられるか。

(2) 「本典」の説相が「眞實」の四法によつて最後に「眞佛土」を其の所期として開設するに、「方便」が其れを「眞佛土」と並べて、之を「化身土」に代表せしむる理由如何。

(3) 已證の「教行信證」四法が、如何なる理由に依つて「眞實教行證」の三法組織となるか。

等の解決に依りて、意義づけられるであらう。

〔此れに對して「六要鈔」の見解は、先づ其の「眞實」に就いて、「言眞實者是對假權」(一右)となし、「化卷」の題號を釋して又「題目之中言方便者是對眞實化身土者對眞佛土眞化相對五六成次」(八右)と、全く「化卷」を以て六卷總題の外に簡別してゐる。然るに、其の「教行證」を釋するに當つては、「教行證」三常途、教相。信眞化土今師所加。任常教相雖標其三。依爲最要今加後三。但至云題難攝餘者。(1)「行中攝信」(2)「證中廣攝眞化佛土」(九右)と、先に簡別せる「方便」を同一題號釋中に於て、之を「證」に攝してゐる。而して、之を説明して、「鈔主」は其の「行中攝信」を「言南無者」の釋により、「行所行法信是能信。故玄義云。言南無者即是歸命亦是發願廻向之義。言阿彌陀佛者即是其行。以斯義故必得往生」(上)信行不離機法是一。由此義故以信攝行」(九右)と解してゐる。然

「本典」の組織より見たる「行信」の問題に就いて

しそれは「行信」二法の間の説明として正鵠であつても、之に依つて「行卷」と「信卷」の任務が「本典」全般に涉つて説明せられ得るであらうか。即ち逆に「行卷」より「信卷」が特に別開せられねばならなかつた理由は、此の釋に於て明らかでない。又其の「證中廣攝眞化佛土」の義に於て、「鈔主」は「於證雖有往生成佛分證究竟遠近差別先以往生爲其近果是則證也。然往生後所見身土依解行異雖有眞化總攝證中是故且依相攝義門於題目中無未盡失」(九右)と解してゐる。果して然らば、何が故に「解行」の相異に依りて、先に簡別せられた「方便」を此所に攝するのであらうか。これ恐らく先輩の多くが解する如く、「眞實」の終始を明すに因んで、「眞佛土卷」中、「假之佛土者在下應知」(四〇左)とあるにより、「眞佛土卷」と共に暫く「眞實證」中に「方便」の終始を攝したものである。然しながら、此れに依つて「化卷」の全内容が、其の「眞實」に對して緊密な一體系として領解せらるるであらうか。若し「化卷」が因みに明されるものであるならば、「本典」は二部の著述の綜合と見らるのであつて、其所には「宗祖」の己證たる「三々法門」を圓滑に領解して、「眞實」の内容を具體的に説明することは出来ないであらう。加之、其の「眞實」の側に就いて云ふも、「往生卽成佛」を語る「眞宗教義」(自釋「信」三一左)にありては、近果往生、遠果成佛の義は存在しても「六要鈔」(五右等參照)其の説を見ることは出来ない。而して我々と雖も勿論、「眞佛土卷」が、四法の所期として「證卷」より開出せられ、「化身土卷」が、先に擧げたるが如く、「眞佛土卷」中に「假之佛土者在

「下應知」と指摘せられ、「眞化」を果上に對照せられた其の位置を無視するものではないが、如上の解釋に對して、「本典」の内容が、更に緊密なる組織の理由を其所に示してゐるのではないかと思はれる。

されど此等は畢竟同一の根據より、同一の目標に向つて開合せられたと見られるもので、私はこの論證に依りて「本典」の組織理由の上に「行信」の取扱を眺め、以て煩瑣なる「行信論」に一個の解決を見出したいと希ふものである。

## 二

斯くて先づ我々は、「解行」の異なるに従つて分たれた「眞佛土」と「化身土」の相對が、實は「宗祖」に於て、

「就願海有眞有假是以後就佛土有眞有假」(自釋四〇右)

と、其れが眞假の別ありと雖も、共に如來「願海」の内容に於ける相對であることを此の問題に關して注意せしめられる。即ち此の「願海」に就いて、考察を進めることが、今の問題に解決の與へられる検討の中心點ではなからうかと思はれる。然るに斯かる觀點に立つて、「本典」の全般を眺むるとき、我々は弘誓の一乘海を解説せる「行卷」の追釋に、それが展開の據を占めた「本願」の内容としての



「福智」、「方便」二藏の教義が注意せしめられる（自釋一四）。即ち「宗祖」に依れば、其の「福智藏」の内容を「眞實五卷」に展開せしむるに對し、其の「方便藏」を「化卷」に至つて「福德藏」と「功德藏」に展開し、其の開設に對して「三願轉入」の逆觀が成立することを知らしめられる。従つて「追釋」の本願三藏教義の展開が、「化卷」の三願轉入の「愚禿」の批判と相呼應し、「行卷」を中心として、此所に「本典」の順逆二觀が成立し、相呼應することとなる。即ち「三々法門」は、此れを無視しては成立することが出来ないと言つてよい。加之、此所に「眞」、「化」は單なる相對を離れて、三願轉入をあらしめる「眞實」の「選擇願海」に統攝せらるる緊密な同一願海の内容となると見られる。

されば斯様に觀察するときは、「化卷」開設の根據が單に「眞佛土卷」に對顯せるものに非ずして、寧ろ「行卷」にあり、又却つて「化卷」の表現こそが「行卷」より開顯せられた「眞實行」の内容を顯彰せんが爲のものとして領解せらるる。然るに、此の三願三藏の展開に於ける批判は、「行卷」の主たる第十七願の「行」に對して、「機」を標榜する第十八願の「信」であつたことは此所に論證の必要を認めない。即ち此の「信」こそ、第十八願開説の「信卷」の任務とする所である。然るに、又この「信」は「行卷」にあつて、其の開首に、

「謹按<sup>テ</sup>往相廻<sup>ヲ</sup>向<sup>ヲ</sup>有大行有<sup>ニ</sup>大信<sup>ニ</sup>」（自釋四右）

と擧げられ、又既に「教卷」の初めにも、

「謹按<sup>テスルニ</sup>淨土眞宗<sup>ヲ</sup>有二種廻向<sup>ニ</sup>乃就<sup>ニ</sup>往相廻向<sup>ニ</sup>有眞實教行信證<sup>ニ</sup>」(自釋二左)

と四法肩を並べ、「文類聚鈔」(一ノ左)にも「明行」下に

「有大行有淨信」

と雙標せられ」てゐるが、實は此の表現の根據は「行卷」にあつて、先の「化卷」開設の所に「行卷」より分說せられたことを知らしめるものの存することを忘れてはならない。即ち「宗祖」に依れば、

「凡就誓願有眞實行信亦有方便行信其眞實行願者諸佛稱名願其眞實信願者至心心樂願斯乃選擇本願之行信也」(自釋一四左)

とあつて、此所に「宗祖」は「方便」を「化卷」に譲り、第十七願を以て「行願」とし、此の「行」と、一切の批判根據たる第十八願の「信」を「信願」と標して、「行信」兩卷の表現根據を提供してゐる。

「勿論、「文類聚鈔」には此の「願」の配當せらるる表現はないが、其の組織の形式が「行」中に「信」を明す三法組織であつて、此所に「化卷」に相當する内容のないことは、意味深く味はゝれる。而して其れは次第に今の叙述が明らかにするであらう。」

従つて我々は此所に、

(1)「行卷」と、其れより分たれたる「信卷」との関係は如何であるか。

「本典」の組織より見たる「行信」の問題に就いて

(2)「本典」一切の批判根據である「信」は、其の批判を明瞭にせんが爲に、其の同一根據から分たれたる「化卷」と如何なる關係にあるか。

と云ふ兩面の問題に當面せねばならぬであらう。何故ならば、「信卷」が「化卷」を批判する所に、今の第一命題たる「眞實行」の闡明があり、されば「眞實行」として「化卷」に對して「信」の批判を経ぬものはないと見られるからである。

されば、我々は先づ「信卷」と「化卷」との關係を一瞥せねばならない。然るに「本典」の眼目が「三願轉入」に於ける「愚禿」の「機」の救済にあり、之に依りて「本典」は體系を得たのであるとすれば、「機」を標榜する「信卷」の本質は、「至心信樂」の本願に裏付けられた「轉入」の「機」の窮極でなければならぬ。従つて「信卷」の窮極たる「正定聚之機」に對するものは、「化卷」の「邪定聚」と「不定聚」の「機」であり、其處に「正定聚之機」の徳相が「眞佛弟子」として示される。斯くて「宗祖」に依れば、この「眞佛弟子」に就いて、

「言眞佛弟子者眞言對僞對假也弟子者釋迦諸佛之弟子金剛心行人也」(自釋 三一左)  
と示され、其の「假」と「僞」との内容は、更に「信卷」に、

「言假者卽是聖道諸機淨土定散機也」(同上 三三右)

「言僞者則六十二見九十五種之邪道是也」(同上 上)

と述べられて、此所に「化卷」の内容を呼んでゐる。即ち「化卷」には、之に應じて、其の「本末」の兩卷が、

「顯開聖道淨土眞假」(自釋五三左)

「教誡邪偽異執外教」(同上)

を目標とせられてゐる。而して此所に「眞佛弟子」は、

「由斯信行必可超證大涅槃故曰眞佛弟子」(自釋三一左)

と、「行卷」に於ける「歸命斯行信」(自釋九右)等とあらはされた「眞實行信」の領受を標榜してゐる。斯くて

「化卷」は「信卷」の批判の具體的なものであり、此れに對して「信卷」は先づ此の批判の根柢たる「信」の内容を詳述する所に特徴づけられるであらう。されば「信卷」が「行卷」と關係して、「眞實」の體解を顯はし、

「故知一心是名如實修行相應即是正教是正義是正行是正解是正業是正智云々」(自釋三〇右)

等と結語せらるるに對し、「化卷」はこの「信卷」への過程批判を其の内容とする所に「化卷」の本領があると見られる。

然るに、斯くの如く「信卷」が一面に「眞實行信」の體解を示し、同時に「方便行信」を批判するものとすれば、「行信」兩卷の提撕に於て、一往「信卷」の「機」に對すれば、「行卷」は「機」の所修の内容を示

す「法」の立場を取ると見られる。されど「法」と見られる「諸佛稱名」の「行願」も、「機」と云はるる「至心信樂」の「信願」も、共にこれ如來選擇願心の「願事」としての内容の表現であり、衆生に取つては一往相廻向の領受内容でなければならぬ。即ち四法が共に如來往相の施與であるならば、齊しく「法」であると共に、又同じくこれ具體的な「機」の體解の内容でなければならぬ。「行信」の問題はまさに此の關係を無視して局部的に考察すべきではないであらう。然るに「宗祖」は何故に「信」に於てのみ「機」を標榜せられたであらうか。此所に我々は「行信」兩卷の關係を顧みねばならない。然しながら、此の問題の解決は畢竟するに、兩卷の分開が、其の關係に於て「分説」であるか、或は「機法」の「相對」であるかの決定に歸する。即ち「往相廻向」の展開に従つて、「行卷」より「信卷」を開き、「信」が「行」に攝せられるとすれば、其の關係は「分説」であり、「行」を「法」とし、「信」を「機」とすれば、それは從來の如く「相對」でなければならぬ。これ實に「行信研究」の中心命題たるを失はない。

されば斯かる分岐點に立つて、其所に要求せらるるものは個々の表現ではなく、寧ろ兩卷の組織の問題である。然るに之に答ふるものは、兩卷を開説する「往相廻向」の展開でなければならぬ。即ち之に依れば、「行卷」は其所に自からなる二段の分開が其の本質に關して跡付けられる。即ち其れは「行卷」の説示に従つて、これを、

(一)「謹按『往相廻向』有『大行』有『大信』大行者則稱無碍光如來名<sub>至</sub>……又云『真宗』<sub>遇</sub>可<sub>レ</sub>知<sub>（自四右一左）</sub>釋

(二)「凡就往相廻向行信行則有一念亦信有一念言行之一念者至乃……超世稀有之正行圓融真妙之正法至極無碍之大行也可知」(同上九左一)

と分たれて、其の結論を迎へてゐる。然るに「行卷」の此の説示は、又「信卷」に於ける二段、即ち、

(一)「謹按往相廻向有大信大信者乃……爾者若行若信無有一事非阿彌陀如來清淨願心之所廻向成就非無因他因有也可知」(自一九一—二右釋)

(二)「夫按真實信樂信樂有一念一念者乃……故知一心是名如實修行相應……可知」(同上二八左一三〇右)

と云へる「大信釋」及び「信一念釋」を待たねば、廻向として全的に開顯せられたと云ふことが出來ない。これ即ち「六字」の内容として、「行信」不離なるが儘の分説を示すものではなからうか。加之、

「證卷」に、

「然煩惱成就凡人生死罪濁群萌獲往相廻向心行即時入大乘正定聚之數」(自三五右釋)  
と、兩者相具して「證」に到ることを述べる「宗祖」は、其の「行」を明す「行卷」に、

「爾者獲真實行信者心多歡喜至乃歸命斯行信者攝取不捨故名阿彌陀佛是曰他力云々」(自九右釋)  
と述べて、救済の前に「行信」を一具に明し、「信卷」には、先に擧ぐる「眞佛弟子」の、

「由斯信行必可超證大涅槃」(自三一右釋)

と示してゐる。又「名號」が直爾に「行」であるか、或は衆生の「稱」に依りて「行」の名を得るかは、論

「本典」の組織より見たる「行信」の問題に就いて

議の存する所ではあるが、今假に後者に從ふとすれば、「信卷」の、

「眞實信心必具名號名號必不具願力信心也」(同上二六丁左)

とあるは、「行」が「信」の批判に必具して決定せらるるものなることを語ると見られる。されば、此所に「行卷」遂に「行」のみならず、「信卷」亦「信」のみを明し能はず、「行信」「信行」一具にして「往相」の「證果」を迎へることを示してゐる。斯くて、既に「行卷」が「往相」の「行信」を明し、其の「往相廻向」なるが故に「歸命」せられ、同時に「獲得」せらるる「行信」を説くに、何ぞ煩はしく「信卷」を特に別開して、「信行」を詳説するのであらうか。蓋しこれ、「信卷」が特に何等かの爲にする理由のもとに分説せられて、第十八願を標したのではなからうか。

然るに我々は、先に舒べた如く「行信」分開の根據が「信」の批判による「方便」開設と同一の所にあつたことを想起せしめられる。即ちこの「信」の決定的な批判が、十九願に依る「行々相對」を、更に廿願による「教頓機漸」の判に依つて、「信」の批判を明瞭ならしめ、「十九」「二十」の「發願」と「廻向」に對して、「十八」の「願事」を「信樂」にとり、其所に十八を「行成就」とせず「信成就」の「願」となす理由を見出したのではなからうか。而して其の同じ理由が此所に展開して、妄情に汚濁せられた「二十」の「行」を簡んで、「行」を其の成就のもとに取り、第十七願のもとに寄せ、以て「行願」となしたのではなからうか。即ち此の間の消息は、「心」の批判に立ちて、「三願轉入」を徵起せる「宗祖」の

「凡大小聖人一切善人以本願嘉號爲己善根故不能生信不了佛智不能了知建立彼因故無入報土也」(自釋)(五二左)

と云へる判釋に明らかである。従つて斯く見るときは、「三信」、「十念」と「信行」を誓へる十八願よりの十七願の分限は、相對的逆觀の立場より、「本典」の成立事情を示して、その「信」が「至心信樂」の「願」による廻向の「信」たると共に、「行」が又「諸佛稱名」のもとに選び寄せられた廻向の「行」として、其所に四法に於ける「法」の概念を明瞭にし、又之を逆に「本典」の説相を示す絶對的な順觀たる「往相廻向」の展開に寄せるときは、「十七願」の「行」より、「十八願」の「信」が廻向として展開する自然さを思はしめられる。これ即ち「願成就文」に於ける次第たるを失はない。されば、此所に「往相」の展開と、「本典」の成立事情を語るものとの順逆二觀が成立するのであつて、「信卷」は一面斯くて十八願より十七願を分限して「本典」の成立を語ると同時に、他面、又「往相廻向」の展開に従ひ特に「往相廻向之願」と名付く可しと云はるる「行卷」によりて提示せられた「眞實行信」を「化卷」に對して、「機」に實證せんが爲の理由に基き、「願」を標して、「行信」不離なる儘、「選擇願海」中に暫く分説せられたものと云ふべきであらう。されば「宗祖」は此所に誓願の配當を結んで、直ちに、

「斯乃選擇本願之行信也」

とせらるる自然さを領解することが出來やう。

「本典」の組織より見たる「行信」の問題に就いて



果して然らば、「信」、「化」兩卷は、共に「機」を標榜して相對し、遂に「行卷」が「眞實行信」を提撕する所に、其の實證として統攝せられる。されば斯かる「信卷」の特殊的立場を認容すれば、四法に於て「行」を「法」とし、「信」のみを「機」とする「行信」の「機法」對立は解消せられ、「機」の實證は「往相」の展開に對して、却つて「歸命斯行信」等と云へる表現の相を其のまゝ、領解することが出来るであらう。従つて、「題號」に「信」、「化」の名を沒する理由が、却つて「機」の實證を「顯」の字に擧げ、此の事實を領解せしむるものではなからうか。而して「眞佛土卷」が四法の所期として展開せられた理由から、「證卷」に攝せられ、又四法の展開を可能ならしめる根源として如來「淨土」の名に擧げられたと見るときは、「顯淨土眞實教行證文類」の題號の意義は此所に充足せられる。されど、「化卷」の表現は、其の次第として、之を「往相廻向」の展開の内には述べられず、「方便」の誘因、其れが單なる簡別に非ず、先づその果を示して「眞實」の批判に映じ、其の統攝を意味して、自己の過程を顧み、以て其の「眞佛土卷」の後に從はしめる。これ極めて當然であつて、此所に却つて、其の「果」を以て卷を標し、其の說相を「解行」の次第に從はしめざる所にも、「化卷」の任務を抽象せしめてゐる。斯くて此所に上來の意を具し、「化卷」の卷尾に「顯淨土眞實教行證文類」とするは誠に當を得た其の緊密性を物語るものではなからうか。然り而して、又此の順逆、相絶の二觀を有する六卷の内容を總括して端的に示されたものが、「往相廻向」の四法、「教行信證」の立題ではなからうか。されば三法が

四法に分開せらるることは、單に「方便」を選捨せる眞實四法上のみの所論ではなく、「權假」と「邪義」の統攝を「願海」の批判に見た、「宗祖」の自からなる求道の過程ではあるまいか。

### 三

上來、我々は「信卷」が「四法」に於ける「眞實行信」を開顯せんが爲に、「行卷」より「信卷」を「化卷」に對して分説し、其所に十八願を標榜して「信卷」の特殊的立場を認めしめたことを略論した。即ち「宗祖」は、「往相廻向」が衆生に一切の批判の眼を與へる「信」を闡明せしめる必具の「行」の本質を顯はさんとして「信」を「信卷」に分説し、却つて「行卷」を標舉するに、「本願の嘉號を以て己が善根となす」の迷に陥らんことを慮り、之を諸佛稱名、衆生聞信の義に基いて、第十七願を「行願」とし、相絶二重の立場を用いて、此所に「選擇本願」の「行信」を決定せられた。されば如來の「往相廻向」にありては「行具」の「信」に衆生を見出し、「往相」の展開を示す立場（衆生にとりては「信具」の「行」に如來の救済を讃仰せしむる）。「本典」の成立事情を示す立場。即ち此所に「行信」兩卷の分説たる所の「本典」の説相に従ふ一面の役割が存すると共に、「信卷」が「機」を標榜することは、「行卷」を之に對して「法」となし、以て「行卷」に對せしむるものでなく、自から「邪定」、「不定」を標する「化卷」の「機」に對せしめて、「本典」の説相の成立を示さんが爲であつた。斯くて「往相廻向」の「行信」を「方便」のそれに對して實證する「信卷」の任務は、其の「行信」に於て「眞實行信」の内容を明らかにせねば

ならない。されば、我々は此所に再び「行卷」に就いて、「信卷」の持つ任務を、曾て「信卷」が「化卷」に對したと同様に遂行せしめねばならぬ。即ちこれ上來の題號の意義を愈々必然的に決定せしめるもので、今の主題たる「行信」の分説の關係事情は、それが絶對的順觀の立場にありながら、却つて上來の「機」に於ける「信」、「化」の任務を説明し、四法の位置問題を解決するものと考へられる。従つて又一面に「行法信機」の偏執説を放棄せしめる、我々の主張の重點たるを失はない。

#### 四

然るに「行卷」にあつて、「化卷」に對し「信」の批判する「行」の本質を決定するものは、「大行」の定義たる「宗祖」の、

「大行者則稱無礙光如來名斯行即是攝諸善法具諸德本極速圓滿真如一實功德寶海故名大行」

(自釋  
四右)

と云へるを否定することは出来ない。而して「行卷」にあつて「宗祖」の「行觀」を決定するものは、其の標舉及び其れを説明する細註の、

「諸佛稱名之願 淨土眞實之行(同)  
選擇本願之行(上)

が持つ意義と内容でなければならぬ。即ちこの標舉及細註の具體的説示が「行卷」の内容として、「大行」の定義をあらしめるものと云はねばならぬ。斯かる見地に立つて、「行卷」の内容を検討するに、

「行卷」は我々が先に分類した二段を、更に三段となし、其の要を提示してゐる。即ち其れは「宗祖」が「大行」の定義を明し、「經典」を以て「稱名」と其の「具德」を語る一段を總説段と見るに對し、具説段として先の二段が考慮せられることである。即ち其の「往相廻向」の展開に従つて「初祖」、「龍樹」の「論」に初まり、「元祖」の「選擇集」に至る傳統の考察は、其間に「六字釋」を織り交せて、「宗祖」の結語たる、

「明知是非凡聖自力之行故名廻向不向之行也大小聖人重輕惡人皆同齊應歸選擇大寶海念佛成佛」  
(自釋 九右)

とあるより見て、之を「行體論」とし、以て其の具説の第一段と見ることが出来るやう。之に對して次に「行一念」を釋し、「善導」の「下至一念」、「一聲一念」、「專心專念」の釋に依つて、「轉釋」を試み、「今彌勒付囑之一念即是一聲一聲即是一念一念即是一行一行即是正行正行即是正業正業即是正念正念即是念佛則是南無阿彌陀佛也」(自釋 一〇左)

と先の「行體論」を「行相論」に移さんとする一段を擧げることが出来る。即ち此の二段が先の「總説」の「稱名」の本質と具德を傳統に跡付けて證左せるものと見られる。斯くて「宗祖」は、此の二段を總説に對して結論し、其の領解を要約して、

「斯乃顯眞實行明證誠知選擇攝取之本願超世希有勝行圓融眞妙之正法至極無碍之大行也可知」

(一自  
一  
右釋)

となしてゐる。

斯くの如く分類するときは、「大行」の定義に就いての總説と、「行卷」の結語の中間にある「行體」「行相」の具説二段こそが、結論に對して「行卷」の標擧及細註の意義を領解せしむるものではなからうかと思はれる。然るに其の「行體論」は遂に之を「宗祖」の「六字釋」に窮まると見らるゝから、「行卷」研究の二大眼目は、「六字釋」と「行一念釋」の検討に歸すると云ふべく、其所に我々の提出せる問題の解決が存するものと考へられる。

五

「宗祖」に依れば、「善導」の「言南無者」の釋を受けて、傳統諸祖の領解を「六字釋」に統一し、自釋を施してゐる。この六字の「行體論」は正しく、「行一念」に移される「行相論」に依つて其の本質を領受せしむると見られるのであるが、今其の文を擧ぐれば、

「爾者南無之言歸命歸言也又歸說也說字悅又歸說也說字悅音悅稅二音告也命言業也招引也使也教也是以歸命者本願招喚之勅命也言發願廻向者如來已發願廻施衆生行之心也言卽是其行者卽選擇本願是也言必得往生者彰獲至不退位也經言卽得釋云必定卽言由聞願力光闡報土眞因決定時尅之極促也必言審也然也分極也金剛心成就之貞也（自釋六左）

と述べられてゐる。之に就いて、その「行體」を概觀するに、「南無」の二字は梵漢對照して、忠實なる字訓を経ることに依り、

「是以歸命者本願招喚之勅命也」

と先づ決定せられてゐる。而して次に其の勅命の依りて來る如來の「願心」を挙げ、「宗祖」は之を、

「言發願廻向者如來已發願廻施衆生行之心也」

と指摘せられる。この「衆生行」を廻施せんとする「願心」は斯くて其の必然的な願心の發動として、先の招喚を如實にあらしめる如來自からの實在が、如來自からの「行」に依りて「卽是其行」と表明され、

「言卽是其行者卽選擇本願是也」

と、それが「本願」の名に依りて的示せられてゐる。即ち此れ第十七願の名聲普聞の誓約によりて、「阿彌陀佛」の實在を知らしめる「願心」の表現でなければならぬ。従つてこの願心が「選擇本願」として、「卽是其行」の「行體」を示す所、其の「行用」が、此所に、

「言必得往生者彰獲至不退位也」

と、衆生聞信の具體的救濟の相を、招喚の内容に義として含み、其の體の内容に、「經」(成就文)「釋」(十住論)の「卽得」と「必定」の義の會通に依りて、「必得」の必然性が、

「即言由聞願力光闡報土眞因決定時尅之極促也必言審也然也金剛心成就之良也」

と、「聞」による「信決」の衆生を見出さんとしてゐる。斯くて此所に「願心」に依つて、「衆生行」として廻施せられたる「本願」の内容としての、如實修行の「稱名」は、この「聞」による「信決」の必然性に、其の一切の「行」を選捨して、「阿彌陀佛」の實在の前面に發動せしめられ得るであらう。されば、「六字」は、此所に如來の「名告」と、「名告」の事實を知らしめるものとして、「諸佛稱名之願」に依りて、「必得往生」の必然性を主張し得るものとなるであらう。従つて、この「諸佛稱名之願」によりて明らかにせられた名號「六字」の願心の表現こそ施與せられたる「衆生行」の全貌であるが故に、その願意の表現ある所、「本願の嘉號」を己が善根と執する「無入報土」の「行」は簡ばれて、衆生の爲の「淨土眞實之行」を願心中に認めしめられるであらう。さればこれ「信卷」に明す「正定聚之機」の如實なる所修であり、下に明す「選擇本願之行」と共に、「諸佛稱名之願」を標して、「淨土眞實之行」と細註せらるゝ所以ではなからうか。斯くの如く領解するときには、「六字釋」の内容は、既に「覺體」を成就せる眞佛土の内容如來の衆生に向ふ、「無礙光如來」の「名」の所在と内容を語り、「大行」をあらしめる根柢となるものとなる。

然るに「宗祖」は、此の「行體」を衆生の「行相」に移さずして、「行卷」の本質を論ずることの不當なるを物語る如く、「行相」としての「行一念釋」が、「往相廻向」の内容に、衆生の修相を點じてゐる。斯

くて、「宗祖」に依れば、「行一念釋」の内容は、

「凡就往相廻向、行信行則有一念亦信有一念言、行之一念者、謂就稱名、偏數開顯、選擇易行、至極故大本言佛語、彌勒其有得聞、彼佛名號歡喜踊躍乃至一念、當知此人爲得大利、則是具足無上功德」  
已（自釋上）（九左）

と領解せられてゐる。これ先に「行信」兩卷の分説であることを物語る一表現根據たりし所のもので、それは「信卷」の「信一念釋」たる、

「夫按眞實信樂、信樂有一念一念者、斯顯信樂開發、時尅之極速、彰廣大難思、慶心也是以大經言諸有衆生聞其名號、信心歡喜乃至一念、至心廻向願生彼國、卽得往生、住不退轉」（自釋二八左）

に應ずるものであつた。然るに、此の「信一念」は、其の第一義たる「斯顯信樂開發時尅之極速」と云へるものが、「願成就文」釋の、

「然經言聞者衆生聞佛願生起本末無有疑心是曰聞也」（自釋二九右）

とあるを内容とし、其れに依りて起るものであるが、それが先の「六字釋」の「卽言由聞願力光闡報土眞因決定時尅之極促也」と云へるものに一致するは明らかである。又其の第二義たる「彰廣大難思慶心也」が、爾下の「成就文釋」たる、

「言信心者則本願力廻向之信心也言歡喜者形身心悅豫之良也」（同上）



と云へるを内容として、「六字釋」の「必言審也然也分極也金剛心成就之良也」の意であるは明らかである。

斯くの如く對照するときは、「信」が衆生の「生因」の決定を跡付けることは、此所に明らかであり、「行一念」が其の根源「彌勒付囑」の一念に於て、「其有得聞彼佛名號」を前提として、其所に「歡喜踊躍乃至一念」と示される事實は、これを證するに充分である。されば、此の兩一念の關係は、「信決」の上に論せらるべく、「信一念」が「六字」の端的なる領受所得を語ると見られた今の對照よりすれば、「六字釋」と「行一念釋」は、此所に暫く「行信」兩一念の關係に移して考察せられてよいであらう。然るに、此の兩者の關係は、今の「付囑」の文に明らかなる如く、「信決」上の必然的發動が「行一念」の相で、其の「謂就稱名徧數顯開選擇易行至極」と云ふは、此所に「信」に決定せられた「稱名」の「行」の端的なる具徳の「相」と解することが適はしいであらう。されば、「行一念」は、「本願力廻向」の「信一念」の批判を経て領受せられた「本願」の「乃至十念」を顯はすものと見られる。従つてこの「乃至十念」は、此所に先輩の多くが主張せるが如く、「細註」の「選擇本願之行」を意味するものを見られるであらう。若し然らば、「宗祖」が「行一念」の跡付けとして、「善導」の「云專心專念」の專念によりて領解せられ、一念一聲等と釋せられるものとして、此所に「大行」の「稱」を意味するものと思はれる。斯くの如く觀察し來るときは、「大行」とは此所に「六字釋」と、其の領受を語る「信一念釋」が決定する「行一念」の修相を具し、其所に「稱名」として、「行信」の廻向を語り、「行卷」の本質を提擧するもの

と見られる。されば此所に「大行」の定義は、其のまゝ「行卷」の具說二段を代表する二行の細註の意を滿たすものとなり、又其の大悲示現、名號成就の根源に遡つて、「行卷」の標舉を自然に解することが出来るであらう。従つて、此所に兩卷の關係は、之を以て律するを得べく、その「行」を以て「行信」不離を語りながら、中には「信」のみを「機」とし、「行」を全く「信前」のものとし、或は「所信」の法體にのみ局りて之を解するは、「行卷」構成の提撕を領せぬものと云ふべきであらう。即ち「行」が「法」たることは、「信」と相具して「法」たり、又共に「機」の領受であつて、他力廻向は此の純粹性を語るものでなければならぬ。されば斯かる見解は、「行信」の能具所具一體の關係に於て、「化卷」に對して如實の修相を示し、此所に十八願より十七願を分開して、「本典」の成立を語り、又「本典」の説相たる「往相」の展開に従ひて、「行卷」より分離せられた「信卷」の、故意にせられたる特殊的な二重の立場を認容せざるものと云ふべきではなからうか。蓋し是れ「行信」兩卷のみに眼を置いた一面的な見解であると思はれる。然しながら、既に「機」を標榜せる「信卷」の所對、「機」に於ては「化卷」の二機に對し、四法に於ては、他の三法と共に「願」に裏付けられ、「歸命斯行信」と云はれる。此所に明らかなるものが存するのではあるまいか。而して、かの「行卷」がその「行」の具說の徵起と結語に、常に「行信」を併舉するは、又遂にこの「信卷」の特殊な二重の任務を思はしめるものではなからうか。されば、これ「四法」の無視でないことは明らかで、「大行」が「行信」を示すは、「信卷」に對するの

ではなく、正しく「行信」を提擧するものであり、此所に「行信」を不離として四法を明瞭に領解せしむる。而して其れは他面、既に「化卷」の存する所、「正定聚之機」を標榜する「信卷」のあることを否定するものではない。只此の事實を承認すれば足るのであつて、「信」はたとへそれが、「機」を標榜する「信卷」の詳述する所であつても、「願」を標して、「選擇願心」の「往相廻向」たるものなるが故に、「教行證」と同じく四法の立場に論せられて、同一の位置に置かる可きであらう。加之、此の「信」が「機」を標榜することは、それが、「信卷」に、

「選擇廻向之直心」(自釋一九左)

と云はるゝ如く、其の「生因」を代表して、「化卷」を簡び、却つて廻向の四法は、共に他力による「機」の領受として、具體的に生活表現を得ることを示すものではなからうか。即ち此所に「四法」の「機」の所期として、「眞佛土卷」の位置の妥當なるを思はしめられる。

## 六

今、上來の考察を結論すれば、「行信」は「往相廻向」の展開に従へば、「行具」の「信」であり、「機受」より論致すれば、「化卷」の「行」と「信」を批判する「信具」の「行」として、其の關係、能具所具なる儘、よく一體の兩面を「本願」の「願事」として顯はし、以て「本典」の組織と説相をあらしめる。而して、此所に四法共に「往相廻向」の内容として、一樣に機受のものたるの普遍性が「選擇廻向之直心」たる

「信」に代表せられて、提撕され、その四法として、「願」に裏付けられた「對象的表現」を持ち得る所に、その位置の決定を領解せしめられる。即ち、これを其の論據たる「行卷」に就いて言ふも、假に其の「六字釋」を以て古來の所謂「所行」とすれば、「行一念釋」の内容は、「信一念釋」の批判を経て、其れに實證せられた「能行」の相を語るべく、此の兩者が如實修行相應する所に「往相廻向」の「行信」を示す「大行」が「稱名」と決定せられる。されば此所に「往相廻向」の展開は「信證」直接して何等の妨げあることを認めない。唯、此所に繰返して主張することは、「信卷」の特殊なる性質であつて、其の「機」を「標榜」せるは、「行卷」に對するものではなくて、「化卷」の「機」に對して「眞實行信」の體解を實證し、一面又第十八願を標舉して、「往相」の展開に參する二重の任務を有することである。されば、却つてこの「信卷」の二重の任務こそが、既に述べたるが如く、「往相」の四法が、如來の廻向として、對象化され得る普遍性を持ち、其のまゝ同時に、「機受」の四法として、我々の體解の他力施與たる普遍性を示すものと見られる。従つて、「化卷」の存在を示す「四法組織」の場合にあつては、「行信」の分開が之に伴ひ、其所に如上の意味を顯はすものとなる。されば、「行」を第十七諸佛稱名の下に明すと雖も、それが單に「機」を標榜する「信卷」に對して、所謂「所行」の法體に局るべきものではなく、又「信決」を経ぬ「能行」を「所信」とするものでは斷じてない。即ち第十八願の「乃至十念」の「行」を第十七願に統攝することは、「稱へざるに先立てる」意味ではなく、廻向の直心たる

「信」の批判に實證せられた「行」こそが、如實なる「行信」の「稱名」であり、其れを「往相」の展開に寄せた所に「本典」の説相が構成せられたと見られる。これ即ち「化卷」の説相に應ずる「本典」の組織そのもので、既に「化卷」の存する以上、「信行」として「行」が「信決」であることは言を俟たない。

斯くて「行信」は、此所に相寄り、相成するものとして、其の關係「能具所具」たり、以て「本典」の組織をあらしめ、衆生の救済を實現するものと見られるであらう。即ちこれ私の本論攷に於ける貧しい主張である。さいはひに「宗意」を妨げずば幸。諸賢の是正を賜はらんことを乞ふ。

（豫約せる紙面の都合上、多くの論證と、諸説の參考批判の一切を省略した爲に、主張の意の圓滑に表現せられなかつたことを遺憾とし、他日之を補ひて、再び御指導を乞ふ事を約する。）